音楽劇

山彦ものがたり（初演版）

作

有吉佐和子

登場人物

第一景

女の子
山彦１
〃２
〃３
〃４
〃５
〃６
〃７
〃８
〃９

第二景

婆
爺
桃太郎
犬
猿
雉
赤鬼
青鬼
黄鬼

第三景

子供1
〃2
〃3
亀
鬼
漁夫

第四景

狸
狐
男1
〃2
女1

第五景

宿の老婆
男（馬）1
〃2
女（馬）
馬喰

第六景

蚤の夫
〃妻
婆

第七景

鬼
馬
〃
女
婆

１
２
馬

第八景

鬼
狐
狸
蟹
猿

第九景

松
天女
漁夫

第十景

亀
漁夫
乙姫
魚
鬼
犬
爺

第十一景

蟹
蟹子
柿
猿
臼
蜂
栗

第十二景

犬
爺
意地悪爺
柿

第十三景

猿
栗
蜂
臼
柿
花咲爺
松
山彦
女の子

第一幕　第一景

舞台はホリゾントの背景だけ。可能なら切株一つ中央に置く。照明フラット。開幕と同時に「山彦ものがたり」のテーマソングの音楽が柔らかく流れる。女の子が一人、客席から音楽に合わせて唱いながら舞台に上がり、観客席に語りかける。袖も着丈も短い紺絣の着物で、帯なし。ぶっちがえの紐が赤い。髪はお河童で、幼児髷が付いていてもいい。リボンも可。

女の子　お父さーん。

男の声　(が連鎖的に近く遠く返ってくる)お父さーん、お父さーん、お父さーん……。

女の子　お母さーん。

女の声　(が谺になって聞こえてくる)お母さーん、お母さーん、お母さーん……。

女の子　ね、分る？そう山彦さんたちの声よ。私が呼ぶと山彦が目をさまして、あちこちへ谺して聞こえてくるの。さあ、みんなで呼んでみましょう。山彦さーん。(返事がない)あら、大人がいるのかしら。子供のような心の人が呼ばないと駄目なのよ。さあ、大きな声で呼んでみましょう。山彦さーん。ヤッホー。

山彦の声　ヤッホー、ヤッホー、ヤッホー。

山彦の一人出てくる。女の子つかまえる。

女の子　こんにちは。

山彦１　こんにちは。

女の子　もっと山彦さんを呼んでみましょう。

山彦１　呼んでみましょう。
女の子・山彦１　ヤッホー。
山彦２・３・４・５・６・７・８・９　（一斉に）ヤッホー。

音楽と共に舞台の上手と下手からトンボ返りなどしながら登場。全員、丈の短い紺絣を着ていて、頭は前髪のある童姿。やはり三尺はしていない。白い付け紐で背後で結えてある。

合唱または輪唱

みんなで遊ぼう　お伽噺
山彦ものがたり
みんなが知ってる　お伽噺
山彦ものがたり
みんな大好き　お伽噺
山彦ものがたり

唄いながら踊って男女一組になると、山彦が一人あぶれてしまう。彼が悲観しているので、女の子が肩を叩いてカップルになって、踊り唱う。

山彦１とＡ　（二人が中央に立ち、他八人は後ろにずらりと並ぶ）

第二景　桃太郎

全員　むかし、むかし、あるところに、
全員　お爺さんと(と言って腰が曲がる)
全員　お婆さんが(と言って腰が曲がる)
全員　ありました。
合唱　爺さは山へ柴刈りに
　　高いお山へ柴刈りに
山彦1　(上手へ退場)
合唱　婆さは川へ洗濯に
　　冷たい川へ洗濯に
山彦A　(大きなたらいを抱えた身振りで下手へ向いて歩くパントマイム)
合唱　背後の山彦たちは、みんな川になってうねりながら合唱を続ける。
　　そこへ大きな桃の実が
　　どんぶらこっこ　すっこっこ

山彦B、両手で大きく円を描いて流れてくる。

山彦B　どんぶらこっこ　すっこっこ
　　どんぶら　どんぶら　すっこっこ
　　どんぶらこっこ　すっこっこ
　　どんぶら　どんぶら　すっこっこ
　　大きな大きな　桃の実だい。

山彦Aが驚いて桃の実を抱きとろうとする。何度もしくじって、

やっと両手にかかえる。川は下手と上手へとび上がって退場。

B　桃から生まれた桃太郎！
　　気は優しくて、力持ち！
　　まあ、理想的な子供だねえ。
婆　今から鬼ガ島に、鬼征伐に出かけます。
B　およし、怪我すると痛いよ。
爺　お爺さん、それは過保護ですよ。男の子は勇ましいのが一番結構。
婆　さあ、行って来い、行って来い。これが日本一のキビ団子だよ。
桃太郎　いって来ます。

音楽、童謡桃太郎のアレンジが混る。
B、ハタキを腰にさし、箒を左手にかまえ、団扇を右手に持つ。
婆が甲斐甲斐しく身支度を手伝う。桃太郎は身構えると、勇ましく出かけて行く。爺はがっかりし、婆ははりきって手を振り、伸び上がったはずみにギックリ腰になり、爺に助けられて退場。
2(犬)、3(猿)、4(雉)、桃太郎と反対から順次に登場。
桃太郎と三匹、舞台を二周して退場する。替って、鬼六匹が登場する。

鬼のコーラス
　俺たちは鬼だよ。
　こわい　こわい鬼だよ。
　赤鬼は危険思想だ。
　こわい、こわい鬼だよ。
　青鬼はエリート意識

こわい　こわい鬼だよ。
黄いろいのは怠け者だよ。
こわい　こわい鬼だよ。
俺たちは酒が好きだよ。
赤鬼は酔うと怒る
天下国家みんなけしからん
青鬼は酔うとくどい
しつこくて鼻持ちならない
黄いろいのは眠りこける
ぐうたらぐうたら眠りこける
俺たちは鬼だよ、
こわい　こわい鬼だよ。

輪になって踊っているところへ、
桃太郎と三匹が飛びこんでくる。

桃太郎　日本一の桃太郎、鬼ヶ島へ鬼征伐に来た。
赤鬼　なんだと、鬼の平和を乱す気か。返り討ちだぞ。
青鬼　どういう論拠でですね、鬼征伐をするんです。いきなり攻めてくるなんて、侵略じゃないですか？まずそれを伺いましょう。
黄鬼　まあ、いいんじゃァないですか。私は中立ですから巻き込まないでくださいよ。
桃太郎　桃太郎の鬼征伐に特別哲学的な理屈はない。昔通りにやる。それ、進め。

音楽と共に派手な立ちまわりがあり、

犬、猿、雉に二匹ずつの鬼がからみ、形勢不利。

桃太郎　みんな頑張れ、勝つことになってるんだ。

たちまち鬼が弱くなり、桃軍優勢となって、トド五匹の鬼が一つの荷車になり、三匹にひかれて退場。

黄　鬼　(目を両手で押えて)もういいかい。

桃太郎　鬼ごっこしてるんじゃないのよッ。

黄　鬼　こわいこわい鬼だぞ。

桃太郎　エイッ(投げとばして退場)

第三景　兎と亀

モシモシカメヨの音楽スニークイン。
兎と亀が上手と下手から出てきて、兎から亀に話しかけ、亀が肯いてゴールにつく。ピストルの音。音楽に合わせて、兎は舞台を二周し退場。亀はゆっくり歩いている。子供三人登場して、これを見つける。

子供１　あッ、亀だ。

子供２　亀だ、亀だ、捕まえろッ。

亀　あのォ、マラソンの途中なんですけど。

子供３　なんだか亀が唸っているよ。
子供１　生意気だな、この亀。
亀　本当なんです、マラソンなんです。
子供２　亀って、不思議な声ですね。
子供３　ひっくり返しちゃおう。

漁夫、竿(ハタキ)と魚籠(屑かご)を持って登場。

漁夫　こらッ、動物をいじめるんじゃないよ。離してやんなさいよ。いけません。めッ。

子供たち退場と同時に音楽。

漁夫　鶴は千年、亀は万年生きるというから、お前がどのくらいの年か知らないが、いい年をして陸の上で子供にいじめられるなんて、みっともないよ。さあさあ海に帰りなさい。
亀　でも、あのォ、マラソンの途中なんですけど。兎さんに悪いですよ。
漁夫　ぐずぐずいうところを見ると相当の齢なんだろうね。可哀そうに。さあ、海には龍宮という結構なところがあるんだろう。さあ帰りなさい。
亀　そんなことしたら、兎さんに悪いですよ。本当にマラソンが始まったばっかりなんですけど。
漁夫　さあ手をひいてあげるよ。いいかい、まだ歩くのは大丈夫だね、お爺さん。

亀　お爺さん？

やがて、しおしおと退場。

漁夫　さようなら、元気で天寿を全うしなさいよ。ああ、やっぱり海の中だと上手に泳ぐねえ。よかった、よかった。いいことをすると実に気分がいい。今日はきっと沢山釣れるだろう(退場)

兎がピョンピョン音楽にのって登場し、舞台を一廻りする。

兎　お婆ちゃんから聞いた話だけど、昼寝して亀に負けたバカな兎がいるんだって。油断大敵。(もう一周して)さあ、そろそろ山が見えるところだ。休まずに走ろう。

第四景　狐と狸の化かしあい

狸　ショッショッショジョ寺
ショジョ寺の狸は化け上手
ポンポコの腹鼓、(空中回転)
打てば忽ち石の地蔵さん。

狐　お地蔵さん、お地蔵さん。

どうぞショジョー寺の狸めに
勝たせて下さい、お願いです。
狐と狸の化かしあい、
勝たせて下さい、お願いです。

狐頭を下げ地蔵の様子を伺いながら、もう一度唄い出す。

狐　勝たせて下さい、お願いです。

狐が狸をくすぐるので転んでしまう。

狸　これは参った、しくじった。
狐　それでは今度は私の番ね。今からこの場所を三人の旅人になって通るから、その中のどれが私か当ててごらん。
狸　よし、分かった。

兎が一心不乱に走って通る。二人の男と一人の女旅姿で、
それとすれ違いに登場する。

男１　兎が走って行きましたね。
女　山の中なんですねえ。あなた、私はもう疲れて来たよ。
男２　宿屋がまだ見えないね。道を間違えたんだろうか。
男１　いや、大丈夫、この道で大丈夫です。しかし山道を歩くのは心細いものですよ。
女　本当に、いい道づれが出来て助かりました。ねえ、あなた。
男２　本当だねえ。三人いればどんな旅でも安心ですよ。

女　きゃあッ。

狸、さっきからじろじろ眺めていたが、我慢しきれなくなって飛出してしまう。

狸　おい狐、うまく化けたなあ女のくせに。どれがお前か、どうしても見分けがつかないが、女だから女に化けたのだろう。さあ、尻尾を出して見せてくれ。

と言ったとたんに男2と男1に組み伏せられる。

男1　さっきは兎が通ったと思ったら、今度は狸ですね。随分けものの多い山だ。

狸　おい、おい、狐。もうやめてくれ。俺が負けたんだ。苦しいよ、苦しいよ、そんなに首をしめられたら。

狐、笑いながら出てくる。

狐　それは人間よ。私はここよ。私はまだ何にも化けちゃいないわよ。(笑う)

男2　宿についた狸汁を作って温まろうと思ったのに、惜しいことをしました。

女　ああ怖かった。どうなることかと思いましたよ。

男1　あっちへ逃げたのは狐のようでしたねえ。化かされないだけよかった、よかった。

男２　暮れてきましたねえ。
女　寒くなってきましたよ。
男１　腹が減ってきたんですよ。
男２　あッ。
女　光が見えましたね。
男１　宿屋ですよ。急ぎましょう。

第五景　馬になった人間の話

宿の老婆　これはこれはお客さま。ようこそおいで。さぞお疲れでございましょう。すぐ御飯をたきますから、それまでのお凌ぎに、この草餅を召し上れ。私の店の自慢の草餅でございますよ。はい、お茶をどうぞ。おいしいでしょう、その草餅は特別の味がついてますのでね え。さあ支度をして参りますから、ごゆっくりお上がり。（退場）
男１　草餅か、有りがたいな。
男２　うむ、これは旨い。

旅姿の三人、もくもくと食べ続ける。茶も草餅も手真似である。音楽。照明次第に暗くなる。満腹になるにつれて、目の皮がたるんでくるこなし。やがて草餅を食べながら、次々と眠りこけてしまう。

老婆　お客さん、御飯の前に、お風呂は如何ですか。あらまあ早くお休みですねえ。お風呂・・・・・に入っといてもらった方が、いい値になったんだが、まあ仕方ない。（退場）

やがて空が次第に明るくなる。女の子が寒そうに登場し、赤い手袋を頭にのせて、鶏の鳴き声をし、バタバタバタと退場。男2、ごろりと寝返りをうって起き上る。

男2　ヒヒーン。ヒヒーン。

男1　あれ、どうしたんだろう。まるで馬小屋の隣に寝かされたみたいだな。

女　ヒヒーン。

男2　お前、よせよ。馬の真似するのは。寝呆けるのは、よせ。

女　馬の真似なんかしてませんよ。ちょっとあくびをしただけですよ。

男2　旅の疲れが出たんですね、よく寝ました。ヒヒーン、あッ。

女　お前は馬になった。

あら、あなたも馬、あっ、あなたも。

三人は互いに馬になったことに気がついて、びっくりする。

男1　いったいこれは、どうしたのだろう。

女　あなた。（泣く）

男2　泣くな、泣くな。こんな馬鹿なことはない。夢でも見てるんじゃないか。（つねってみる）あ痛ッ。ヒヒーン。

女　あなたと初めて旅にでて、こんなことになるなんて・・・・・（泣く）

馬　ヒヒーン、ヒヒーン。

馬のブルース

1

うまい草餅たべちゃった
うまうましたのがうまくない
うまれもつかぬ馬になり
ヒヒーン、ヒヒーン、ヒヒーン、ヒヒーン
ドウドウドウドウドウショウ
うまうましいな
やられたな

老婆　さあさあ、お客さま、朝ですよ。よくおやすみになれましたか。まあ、まあ立派な馬になって、結構、結構。（手を叩いて）馬喰の親方、こっちだよッ。

馬喰　こりゃあ珍しい、牝が一匹いるでねか。たんと藁を喰わして肥らせて、仔馬を産ませてやるべえ。こっちの馬はよ、ちょうど買手の注文にぴったりだから、まず先に売って来るべ。お婆、この二匹にワラを切ってたっぷり喰わしてやってくれ。

老婆　あいよ。

馬2　ちょっと待って下さいよ、あなた。私とこの女は夫婦なんですよ。それで別々に売ろうって言うんですか。冗談じゃありませんよ。この牝馬は、いえ、この女房と私は恋いこがれて一緒になった仲なんです。

女馬　そうなんですよ。お願いですから別々にしないで下さい。あなた、行かないで。

馬２　女房。
女馬　あなた。

二人、ヒヒーンと言って泣く。

馬喰　やけによく鳴く馬だな。さあ、ドウドウ、ドウ。いい体だ。さあ言うことを聞いて、こっちに来るんだ。
馬２　どうぞ道連れのお方、私の女房には手を出さないで下さいよ。
馬１　冗談じゃない。私にも好みってものがありますし、それに馬はそれどころじゃありませんよ。
女馬　あなた。
馬２　女房。
二人　ヒヒーン。
馬喰　ドウドウド、手のかかる奴だ。じゃお婆、後でまた来るぜ。そのとき金は払うからな。
老婆　あいよ、愛よ、待っているよ。さあ、馬草を持ってきてやるからね、仲よくおなりよ。お前さんたちは人間のときっから、どうやら夫婦だったようじゃないか。
馬１　違いますよ。それは人違いじゃない、馬違いだ。
女馬　私とのこの人は夫婦じゃないんです。私の夫は、あっちへ連れていかれてしまいました。ヒヒーン、ヒヒーン。
老婆　ああそうか、お腹が空いたんだね。昨日は草餅だけだったから無理もない。すぐに馬草を持って来てやるから、せいぜい仲よくして持っておいで。（退場）
馬１　困ったことになりましたねえ。

女馬　ヒヒーン、本当にねえ、ヒヒーン、私はどうしたらいいんでしょう、ヒヒーン。

馬１　あまり泣き続けると疲れますよ。それより、これから先どうやっていけばいいか、しっかり考えましょう。

女馬　二人で？（怯える）

馬１　あの馬喰が戻ってきたら、思いきり噛みついてやりましょう。いや、噛みつくのは女の方がいい、あなたが噛みついて、私が蹴とばすのです。そうしましょう。ヒヒーン。

老婆　さあさあ、たっぷりお上がりよ。仲よく一つの桶で食べるんだね。おやまあ、ひどい蝿だよ。尻癖の悪い馬だよ、まったく。（馬１の尻をぶって退場）

馬１　あの婆め、昨夜泊めたときから様子がおかしかったんだ。あいつは馬喰より悪者じゃないかな。腹が減りましたねえ、おや旨そうな藁が入っている。召し上がりませんか。

女馬　藁なんか、食べられるもんですか、ヒヒーン。

馬１　そりゃ私も藁なんか、この年まで食べたことはありませんが、何分にも、こう腹が減っていては、なるほどワラだ。パサパサだね、どうも。茹でる前の干しうどんだ。しかし、旨い。こりゃ驚いた。旨いね、どうも。食べてみませんか。

女馬　ワラが、食べられるんですか。

馬１　自分が人間だと思えば喰えませんが、ものはためし、食べてごらんなさい。ほら、ヒヒン、旨いでしょう。

女馬　こんなものが、おいしいなんて、本当に私たちは馬になってしまったんですねえ、ヒヒーン。

馬１　私たち？

女馬、しきりに熱心に食べていて、馬1の表情に驚く。

女馬　待って下さい。私には夫がいるんです。あの人が別れぎわに頼んでいたじゃありませんか。あなただって自分の好みじゃないって言ってたじゃありませんか。

馬1　人間のときはそうでしたが、馬になって眺めると、あなたの栗毛のいろつやといい、足の形といい実に素晴らしい。もしこのまま、ずっと馬になって生きるのなら、同じ馬同士、仲よくやっていこうじゃありませんか。ヒンヒン、どうです？

女馬　やめて下さい。お願いです。一寸でも近寄ると人を呼びますよ。

馬喰　ヒヒーン、ヒヒーン。

老婆　威勢のいい馬だねえ。

馬喰　牝の方が元気になったようですねえ。あらま、飼馬桶が空っぽだ。

老婆　よく喰ったねえ。

馬喰　ほらよ、これがさっきの一匹分、それからこれがこの二匹分だよ。

老婆　毎度有りがとうございます。

馬喰　また頼んだよ。

老婆　はい、はい。

馬1　さあ、さっききめたように、あなたが噛みつきなさい。私が蹴とばしますから。

女馬　ヒヒーン、どうぞ私を、さっきの馬のところへ連れていって下さい。

馬1　おねがいです、この通りです。ヒンヒンヒン。

馬1　噛みつくんですよ。仕方がないな、それじゃ俺が一人で蹴飛ばしてやろう。ヒヒーン。

馬喰、ぱっと身をかわして二匹の口にスリコギと杓子を喰わえさせ、

馬喰　じゃあ、お婆、あばよ。（二匹の馬をならしながら退場）

老婆　毎度ありィ。へへえ、泊まった客に草餅喰わせただけでこれだけ儲かるんだから笑いがとまらないよ。人間という人間を片っぱしから馬にしちゃあ売り飛ばして、もっともっと金を貯めて、死ぬときはあの世まで持って行くんだ。あれッ蚤だな。蚤に喰われて痒いなんてのは、まだまだ若い証拠だ。（着物をぬぐ）さあ、つかまえてやるぞ、エイッ。

蚤の夫婦が上手と下手から登場。

第六景　蚤の夫婦の唄

そもそも蚤の夫婦とは
でかい女に小男が
言い寄るもののたとえなり
まず段梯子にかけ上がり
ちょいと可愛いお嬢さん
すると女が答えます

大きい男は趣味じゃない
そこで男はかけ下りて
私はあなたにアイラブユー
大きい女は身をすくめ
からかわないでねアイラブユー
しかしキッスは難かしい
何しろ背丈が違うから
なんどやっても行き違い
困った二人は考えた
最初は男が飛上る
次に女が腰を曲げる
ようやく二人は愛しあう

老婆　えいッ。

蚤の夫婦は抱きあって小さくなる。

老婆　さあ捕まえたぞ。二匹一緒につかまえてやったぞ。さあ、捻りつぶしてや、ろ、ハハハックション！

蚤の夫婦すっ飛んで退場。

老婆　風邪ひいちゃ詰まんないね。金を儲けたばかりだというのに。さて、風呂にでも入って温まろうか。（退場）

第七景　馬になった人間の続き

兎、パントマイムで熱心にかけている。
馬2、兎を追いぬいて走りぬける。

兎　あれ、いつから馬がマラソンに参加したんだろう。聞かない話だけど、負けるわけにはいかない。頑張ろう。（退場）

馬2、また登場して舞台を二巡する。

馬2　あった、ヒヒーン、この薄だな。これを食べれば人間になれると浄瑠璃ひきが言ってたんだ。ムシャムシャ、まずいものだな薄は。ヒヒーン、ヒヒーン、あ、鼻に薄の穂が入った。ヒャ、ヒャ、ヒャックション。流感かしら。あッ、人間になった、人間になった、やっぱり本当だ。七つ山を越えた薄ヶ原で斑入りの薄を食べると人間になれる。よし、この薄を全部刈りとって、女房に食べさせてやろう。あの男は手出しをしていないだろうなあ。待ってろよ。（薄を周りかまわず刈って抱える）もしも、あいつが、いや、薄だ。さあ、これを持って一刻も早く女房を人間に戻してやらなきゃいけない。（走り出す）

兎、反対方向から走ってくる男をやり過ごして、

兎　人間もマラソンをやるのかしら。薄を抱えて、変わってるなあ。あの

馬１　馬はどこへ行ったんだろう。早いなあ。頑張らなくっちゃ。（退場）
くる日もくる日も重い荷車をひいて田舎道を行ったり来たり。ああ
あ、人間だった頃が恋しいなあ、ヒン、ヒン。いななく声も元気が
出ねえや。
女馬　おかげで私は安心だけど、あの人は今ごろ何をしているのかしら。
あッ。
馬１　どうした。
女馬　あの人の跫音が、いななきが聞えるんです。
馬１　気のせいだよ。バラバラにして売られたんだ。今頃は目かくしされて臼でもひいてるよ。ああ疲れた。
女馬　馬のくらしも楽じゃありませんねえ。畑を耕したり、肥った人間をのせたり。子供は背中でふざけるし。あッ。
馬１　どうした。
女馬　あの人の声が聞こえるんです。ほら、オーイ、オーイって、聞こえるでしょう。
馬１　気のせいだよ。馬になったんだから、オーイ、オーイって言うわけがない。
女馬　そういえば、そうですね。
男２　オーイ、オーイ、女房よぉ。（二人の前を駆けぬける）
女馬　やっぱりそうだ、あなたァ、ヒヒーン、ヒヒーン、こっちですよォ。
男２　女房か、そうか、そうだ、馬になっていたんだな。さあ、この薄を食べてごらん。私は七つの山を越えて、この薄を刈ってきたんだ。
女馬　これを食べると人間に戻れると聞いたのでね。
（馬１が食べようとするのを押えて）ちょっと待て、女が先だよ。
（急に胸につかえる）ウ、ウ、ウーン。

男２　どうした、食べられないのか、弱ったなあ。

介抱している間に、馬１が残りの薄を食べてしまう。

女　あッ、あなたッ。

男２　よかった、人間になった、よかったねえ。

男１　ウ、ウ、ウーン。

男２　この男は何もしなかったかい？

女　え、ええ、何もしませんでした。毎日、馬車道になって働いて、疲れていましたから、大丈夫でした。

男２　よかった、よかった。

男１　ああ、ああ、助かった。よく助けに来てくださった。それにしても畜生め、あの婆の草餅でひでえ目にあったものだ。

男２　そうですよ。のりこんで行って、仕返しをしてやりましょう。さあ、お前もおいで。（退場）

老婆　（風邪声で）さあさあ草餅を作っておかねばならねえ。そろそろ客のつく頃だ。ハックショーン、どうも風邪ひいちまったな。ハックショーン。ともかく草餅を作っておいて、ハックショーン。

男１　ご免下さい。

男２　こんばんは。

老婆　これはこれはお客さま、ようこそおいで、ハックショーン。お寒いですねえ。すぐ御飯を炊きますから、それまでのお凌ぎに、この草餅を…ハックショーン、召上れ。私の風邪はうつりませんですよ、ハックショーン。

女　まあ、お婆さん、ひどい風邪ですねえ。そんなにひどくて起きてい

ては体に毒ですよ。御飯は私が炊きますから、どうぞこちらでお休み下さい。

老婆　おやまあ親切な方だねえ。どっかで見たような気がするけど、ハックショォ。

女　お大事に。お台所はあちらですね。いいですよ。私にまかせておいて下さい。

老婆　ハックショォ。まあ働き者のおかみさんだね。まず草餅でも召上って下さいよ。この店の自慢ですからね。

男１　おいしそうな草餅だねえ。

男２　お婆さんも一緒にどうですか。

老婆　え、私は、ケ、結構ですよ。ハックション、ハックション。

クシャミのはずみに男二人から口に草餅を押しこまれてしまう。

老婆　この草餅は私にはいけないんです。

男１　なぜだ。

老婆　親の遺言で草餅だけは食べられないんですよ。

男２　何が親の遺言だ。

老婆　喰えってんだよ。（背中をドンと着く）

男１　ウ、ウ、ウーン。

女　はい、お茶をどうぞ。

老婆、ひっくり返って、馬になって起上る。

老婆　ヒヒーン、ヒヒーン、ハーックショイ。馬になっても風邪が癒らな

い。ヒヒーン。

逃げる馬を追って全員退場。
四人登場。音楽と共に背中を向けると、休、憩、五、分となる。
ここへ亀がオーイ、オーイと駆けつけ、中央に割って入り、
休、憩、十、五、分、となる。

第二幕

第八景　カチカチ山

待ちぼうけの音楽で明るくなる。

兎　ゴールはここだけど、亀さんはどうしたんだろう。でも、ともかく僕は、勝った。疲れた。

狐　兎さん、大変よ、大変よ。

兎　何が？

狐　お婆さんが馬になって殺されたの。

兎　え？お婆さんが馬に殺された？

狐　いいえ、狸が殺したのよ。仇を討ってあげるのは兎さんしかいないって聞いたもんだから知らせにきたわ。じゃあね。（退場）

兎　そうか、あのお婆さん、死んだのか。僕らには悪い人じゃなかった

狸　けどなあ。あれ？
兎　タンタンは狸はお人好し、デマと嘘には勝てませぬ。
狸　カッチカッチ、カチカチカチ。
兎　やあ、兎さんじゃないか。カチカチ言ったようだが、なんのことだね。
狸　僕は今、亀とマラソンをして勝ったところだ。ここはカチカチ山なのさ。
兎　そうかそうか、マラソンに勝ってカチカチ山か。
狸　カッチカッチ、カチカチカチ。
兎　ここからどこへ行くんだい。
狸　ごらんの通り薪をしょって、正直爺さんのところへ届けに行くところだよ。
兎　ふーん、僕には嘘をつかない方がいいけどねえ。
狸　嘘なんて、僕はつきませんよ。狐じゃあるまいし。
兎　狐が嘘をつくのかい？
狸　ああ、狐というのは大嘘つきだ、僕は本当にかなわない。
兎　その狐が、さっき僕に告げ口に来たんだ。
狸　へえ。
兎　狸がお婆さんを殺したって。
狸　ええッ。それは変だよ。正直爺さんのところには、お婆さんはいないのに。
兎　あッ。
狸　なんだろう、ボーボーいってるのは。今度はボーボー山かなあ。
兎　大変だ、背中の薪が燃えてるんだ。さっき僕が火をつけたんだ。
狸　どうして？
兎　そんな説明をしている場合じゃないよ。火を消さなきゃ。

狸　あつッ、あつい、あつい、あついよォ。
兎　さあ、転がるんだ、ごろごろ転がって山をおりるんだ。

狸をごろごろ転がして二人で退場。

蟹　おむすびころりんスットントン、おむすびころりんスットントン。
猿　柿というのはなんだなあ、いくつ喰っても種しか残らないなあ。
蟹　あら、お猿のおじさん、こんにちわ。
猿　やあ、誰と思ったら蟹子ちゃんだね、そのおにぎり、僕の柿…のタネと取っ替えっこしないかい？
蟹　いいわよ。はい。
猿　はい。もう一つ柿のタネがあるけど、替えない？
蟹　いいわよ。はい。この柿のタネは食べられるの？
猿　食べられるよ。
蟹　どうやって？
猿　まず。土を掘って埋める。
蟹　それから？
猿　水をやる。
蟹　それから？
猿　それでいいんだ。間もなく柿の木が生えて、いっぱい実がなるからね。実がなったら知らせておくれよ。あばよ。（退場）
蟹　まず土を掘って埋めて、水をやるのね、おなかが空いてきたわ。急がなくっちゃ。

音楽。

第九景　羽衣

八人の山彦登場しつつ合唱

海はひろいな大きな
月は沈むし　日がのぼる
海にお舟を浮かばせて　海に
行ってみたいなよその国

海をふちどる砂浜に
浪が打ち寄せ　風が吹く
海を望んで枝をはる
松も緑の色が濃い

合唱の間に上手に四人で一本の松、下手にそれぞれ二、三本の松になってしまう。

天女　海は綺麗な水鏡
月の雫に　日の香り
海に浸って水浴して

きよめて天に戻りましょう

三尺帯を羽衣のていにして肩にかけ、唄いながら舞いおり、羽衣を脱ごうとして松の木が覗くのに気がつき、片手で松の顔をねじまげてから、羽衣をとり松の枝にかけて泳いでいく。漁夫、腰に屑籠をぶらさげ、ハタキを持って登場。亀を助けた漁夫と同じ。

漁夫　海は汐風かほり立ち
人も招くし　舟も呼ぶ
海の底には龍宮が
あると聞くからそのせいか

いい匂いだな。今日はとりわけていい香りだ。しかし、これは汐風と違う。おや、なんだろう。綺麗な絹だ、軽い。女の着るものだな、きっと。こんなに美しいものを着ているとしたら、いや、こんなところにかけてるところをみると脱いだのだから、すると……。

天女　あら、羽衣が。

漁夫に気がついて、慌てて松の横にかくれる。松が見るので、また顔をねじ曲げる。

天女　あのォ、モシモシ、それは私の羽衣なんですけど、返して頂けませんか。

漁夫　羽衣？返せ？　じゃ、あなたは天女ですか。

天女　ええ、そうなの。その羽衣がないと天に帰ることができませんから、

漁夫　どうぞ返してください。
そうですか、あなたが天人ですか。この羽衣は道理でいい匂いだ。
ウーン、とても返せなくなりましたよ。
天女　どうして？
漁夫　私と結婚して下さい。その後なら返してあげます。
天女　結婚って、なんのこと？
漁夫　え？あのォ、結婚というのは、男と女が寝ることですよ。
天女　寝るって、どうするの？
漁夫　寝るというのは、こうやって横になることです。
天女　横になるの？（同じように寝て）これで私たち、結婚したの？
漁夫　いや、一緒に寝るんですよ。
天女　どうやって？
漁夫　どうって、つまり上になったり下になったりしてですね。
天女　そんなこと、羽衣がないとできないわ。
漁夫　え？
天女　羽衣があれば上にも下にも前後左右に動けるのよ。やってみせましょうか。
漁夫　ちょ、ちょっと待って下さい。結婚して夫婦になると、一緒に寝るのも大事ですが、一緒に楽しく生活をするんですよ。
天女　生活ってなんのこと？
漁夫　生活って、エート御飯を炊いたりですね。
天女　御飯って、なあに？
漁夫　御飯って、喰いものですよ。天人は御飯を食べないんですか？
天女　そんなこと、どうしてできるの？
漁夫　簡単ですよ。こうやって釣糸をたれていると、簡単に釣れますから。

天女　釣れないじゃないの。
漁夫　たまには釣れないときもありますよ。
天女　そう、待つのね。
漁夫　ええ、待つんです。

二人、だまって座っている。天女たちまち退屈してあくびが出る。

漁夫　じゃ、唄って下さい。聞いてますから。

天女、ビートのきいた歌を唄いだすので、漁夫はつられて釣竿で調子をとり、海の中をかきまわしてしまう。

漁夫　ちょっと静かにしてくれませんか。魚が寄ってきませんよ。
天女　唄わないで、踊らないで、それが人間の生活なの？
漁夫　そのかわり働くという喜びがありますよ。
天女　あなた、働いてるの？
漁夫　ええ、今は少し気が散ってますが。
天女　あーあ、退屈ね。働くって。
松　おい、羽衣を返してやれよ。見ちゃいられない。返してやれよ。
漁夫　返せ、返せ、返せ、返せ。
風がはげしくなって来たな。この分じゃシケで、とても魚はとれない。
天女　魚がとれなかったら、どうするの？
漁夫　帰って寝ますよ。
天女　ああ、結婚するのね。
漁夫　寝るってことは、眠るという意味でもあるんです。横になって、目

をつむるんです。

天女　こう？

漁夫、そっと近寄って接吻する。松がしきりと見ている。

漁夫　あのォ、何にも感じませんか？

天女　え？何かしたの？

漁夫　ええ、ちょっとだけ。

天女　そう。眠るって、いつまでも目をつむることなの？

漁夫　天人は眠らないんですか。いつもいつも目は開きっぱなしなんですか？

天女　瞬きはするわよ？

漁夫　一晩中女房に起きていられるのは考えものだな。

天女　え？

漁夫　羽衣は返しますよ。そのかわり天女の舞を見せてください。

天女　いいわよ。でも、その前に結婚っていうの、やってみたいわ。天に帰って土産話になると思うの。

漁夫　それじゃ接吻しましょう。

天女　それ、なんのこと？

漁夫　唇と唇をあわせることです。

天女　ああ、キッスね。

漁夫　なんだ、知ってるんですか。

天女　だってキッスをするのが私たち天人の仕事なのよ。春が近づくと積った雪にキッスして溶かしてしまうの。木にも草にも次々にキッスするのよ。するとどの木もどの草も花で一杯になるの。花盛りが終

わると私たちのキッスで実がなるわ。キッスする度に桃も柿も大きくなるのよ。私、リンゴをこんなに大きくしたことがあるわ。

漁夫　男にキスすると、どうなりますか。

天女　男って、なあに？

漁夫　人間の男ですよ。

天女　あら、そんなことしたことないけど、どうなるのかしら。女のひとにキスすると、かわいい赤ちゃんが生まれるんだけど。

漁夫　それは困るけど、ためしにやってみてくれませんか。

松たち　やめとけ、やめとけ、やめとけ。

漁夫　今日は風が激しいなあ。あれが松風の音ですよ。

天女　そう、後で松にもキスをしてあげなくちゃ。

松、いっせいに恥じらいを見せて、うなだれる。

漁夫　さあ羽衣を返しますから。

天女　ええ、ありがとう。

天女がキスをすると漁夫はぐにゃぐにゃになって倒れてしまう。音楽。

天女　このひと、感じすぎるわ。

羽衣をまとい、唄いながら次々と松に接吻すると松もぐにゃぐにゃになり、ばらばらになって退場する。

天女　私は天女　かわいい心
春風にのり　歌を唄うの
私は天女　やさしい心
口づけすれば　花は開くの
私は天女　きれいな心
ものみなすべて　美しくなる
ものみなすべて　美しくなる

第十景　浦島太郎

漁夫　あれが天人の舞か、唄か。ああ、とても俺の女房にできる相手じゃなかったんだ。おや。

亀、客席から舞台へ登場。

亀　どう考えてもマラソンの途中で竜宮に帰るというのはルール違反ですよ。大分遅れたと思うけど、ともかく参加することに意義があるんだから。

漁夫　あら、また会っちゃった。
助けてやった恩を忘れていないんだな。ありがとうよ、慰めにきてくれて。

亀　違いますよ、誤解ですよ。私はマラソンを続けるために。
漁夫　ああ、そうか、そうか、天人が駄目なら乙姫があるよって言っているのか。
亀　そんなこと一言だって言ってやしませんよ。
漁夫　なるほどねえ、ありがとう、ありがとう。心というのは通じるものだねえ。
亀　ちっとも通じていませんよ。私はマラソンをやるために戻ってきたんですけど。
漁夫　そうか、お前の背中にのればいいのか。こうかい？
亀　弱っちゃったな。私はねぇ、兎に義理がたたないから戻ってきたんですけど。
漁夫　お前の親切には驚いたよ。竜宮というのは、この方向なのかい？
亀　ええ、この方向ですけど、でも誤解しないで下さい。私はマラソン、つまり駆けっこがしたいんです。
漁夫　さかんに話してくれているのは、きっと竜宮の説明なんだろうな。分かった、分かった。
亀　わかってないよ。
漁夫　私が重くないかい？
亀　重いですよ！
漁夫　うまいこと言う、年の功より亀の甲か。あははは。
亀　僕は泣きたいよ。兎さんに悪いなあ。竜宮ですか。
漁夫　そうだ！竜宮だ！
亀　やっと通じた！

亀、泣き出す。やけになって走り出す。

漁夫　歩くのはのろいのに、泳ぎは達者だねえ。あ、あれが竜宮だな。そうだね、竜宮だね？

亀　うるさい！

漁夫　やっぱりそうか、美しいなあ。

舞台を二周したところで、竜宮城が現れる。

漁夫　あれは何？

亀　鯛ですよ。

漁夫　あれは？

亀　平目ですよ。

漁夫　あれはイカかしら。

亀　いえ、タコです。

音楽、魚群の踊りがある。中央に乙姫がいて、団扇をゆらゆら動かし、天女とは色の違う三尺帯を肩にかけている。もちろん別の女優である。

魚のコーラス
乙姫のソロ
魚のコーラス
乙姫のソロ
魚のコーラス

漁夫　ところで玉手箱は、いつになったらくれるんだろうね。

亀　ああ、そうそう、玉手箱を渡せば陸に帰れる。兎さんに悪いから、早いとこ、この人を帰さなくちゃ。

乙姫にささやくと、乙姫がにっこりして、アルマイトの弁当箱を渡す。

乙姫　それでは浦島さん、これが亀を助けて下さったお礼です。お気がむいたら、またどうぞ。

亀　冗談じゃないよ。嫌ですよ、私は、もう。

漁夫　魚を釣る度に思い出しますよ。そうですか、これが竜宮の玉手箱ですか。

亀　さっさと乗って下さいよ。いいですか、はい発車します。

竜宮のグループが退場し、亀と漁夫の二人が舞台を旋回している間に、兎がもがき苦しんでいるのに出会う。

亀　兎さんじゃないですか。どうしたんです。

兎　あ、亀か。どうしたって、ど、泥の舟に乗ってしまったんだよ。

亀　泥の舟に？一人でですか。

兎　狸と乗るはずだったんだけど、狸が何も悪いことしてないということで、つまり僕は狐にも狸にも化かされて、泥の舟にぼく一人で乗ってしまったんです。何しろマラソンの疲れが出て、陸へ飛び戻れなかったんだ。

亀　そうですか。私に掴まっていらっしゃい。陸ではあなたに負けましたが、海なら私のものですよ。はい、しっかり掴まって。いいですか。

（ずっと泳ぎ続けている）

漁夫　どうしたんだい？ああ、稲葉の白兎だね、可哀そうに。（亀に）お前

兎　も面倒見のいい動物だねえ。

亀　モシモシ亀さん、この人、誰？

兎　後で話しますが、理解は誤解だという見本みたいな人ですよ。

漁夫　ふーん。

さあ着いた、いや御苦労だった。有りがとう有りがとう、私は天人も乙姫さまも見たのだから、もういつ死んでもいいよ。さあこの玉手箱（押し頂いて、ふと二人に気がつく）中から毒ガスが出るからね、傍にいない方がいいよ、早く行きなさい。

二人退場。弁当を開けると猛烈な爆発音と白煙が噴き出る。犬、ワンワン、キャンキャン鳴きながら登場する。

爺　おお、なんだ、ポチか。畑の裏を掘れだって？　忙しいね、どうも。（退場）

第十一景　サルカニ合戦

カニ　裏の畑に柿のタネ
蒔いて水やる蟹の子に
お日さまニコニコ笑ってる
早く芽を出せ柿のタネ

柿　出さぬとハサミでチョン切るぞ
蟹　これは大変　芽を出そう
　早く伸びろよ柿のタネ
柿　伸びぬとハサミでチョン切るぞ
蟹　これは大変すぐ伸びよう
柿　早く実がなれ柿の木よ
蟹　ならぬとハサミでチョン切るぞ
柿　豊年だァ万作だァ

柿の木二本が組んだように立っていて、唄につれて成長していくのである。
カニは女性であり、柿は男女一組であってほしい。豊年万作で仕掛物のメキシコ製の果物飾りを体に巻きつける。このところ手品と同じなり。猿、空中回転して登場する。

猿　やあ、カニ子ちゃん。いつか預けたもの返してよ。
蟹　私、何をお猿さんから預かったかしら？
猿　とぼけんなよ。柿のタネを預けたじゃないか。
蟹　あれは、おにぎりと取替えっこしたんですよ。あのときのタネが、こんなに育ったのよ。ほら、実が一杯になっているでしょう。

猿、やにわに柿の木にかけのぼり、手当たり次第に実を食べる。

猿　おい、言っておくがこの柿は、みんな俺のものだから、その気でいろよ。
蟹　どうしてですか。私のおにぎりと取替えた筈ですから、あの柿の種は私のものよ。

猿　黙れカニ婆ァ、にぎり飯と取替えたという証拠の品があるのかよ。
蟹　証拠なんて、あなたと私の信頼関係において取替えたのですから、法律よりも倫理の問題じゃないですか。
猿　お前が理屈を言うのなら俺も理屈で返してやらァ。柿の種を土に埋め、水をかけろと教えたのは誰だ。俺さまだ。教えてなければ今ここに、この柿の木ははえていない。だからこの柿は俺のものだ。
蟹　ひどいわ。だって土を掘って柿の種を植えたのは私よ。水をかけて育てたのは、この私よ。
猿　柿の種をお前にやったのは、この俺だ。
蟹　あれは、おにぎりと取りかえっこしたじゃない。
猿　だまれッ、にぎりめしを土にうめて、この柿の木ができると思うか。この柿の実は俺のものだ。(柿を投げる)
蟹　ひどいわ、ひどいわ、それに柿の木だって折れるわよ。
柿　ミシミシ、ポキーン。
蟹　ほら、猿も木から落ちる。気をつけないと危ないですよ。大丈夫ですか。
猿　うるせえ。(青い実をカニに投げつけ)さあ、赤い柿は全部俺のものだ。

蟹、泣いているところへ、臼と蜂と栗(女)がやってくる。

三人　どうしたんだ、どうしたんだ。
柿　どうしたもこうしたもありません。猿の奴がやってきて、かくかくしかじかだったんです。カニは重傷ですねえ。
臼　よし、私が担いで行こう。

蜂　しかし猿は本当に悪い奴だ。この槍で刺し殺してやろうか。

栗　蜂さん、お待ちなさい。今は怪我の手当が先だ。ゆっくり対策を考えましょう。

臼　うん、これは栗の言う通りだ。そうしよう。

蟹子　お母さん、お母さん（泣く）

三人カニを抱き上げて退場。

第十二景　花咲爺

犬、キャンキャン言いながら、柿の根もとを指す。

爺　ここを掘るのかい？私の留守に、いつの間にこんな柿の木が生えたんだろう。私も年をとる筈だ。

チリトリをスコップにして掘りにかかると、意地悪爺さんが柿の木の後からそっと覗きにくる。

爺　おやおやおや、大判小判が、ざっくざく出てきた。これは大変だ、大変だ。私は大変な大金持ちになってしまった。

意地悪　やあ、これはこれは大変なことですね。私にもお宅のポチを貸して下さい。

爺　いいですとも、さあさあ、どうぞ。
意地悪　さあ、次はどこを掘ればいいか、俺にも知らせろ。
犬　困ったなあ、僕は小判が出ると言ったんじゃなくって、猿がカニを苛めているから助けてやって下さいと言ったんですよ。それがこんなことになって僕も驚いているんですよ。
意地悪　困ったねえ。私には犬が何を言っているのかさっぱり分からない。さあ、ともかく掘る場所を教えなさい。でないと、ぶっ殺すよ。
犬　キャン、キャーン。ぶっ殺さないで下さいよ。そんな乱暴なことはありませんよ。助けて下さい、お願いです。
意地悪　そうか、ここか、ここを掘ればいいのかい？（柿の木の前と反対側を掘る）何も出て来ないよ。
犬　出てくる筈がないでしょう。さっきのは偶然だったんですから。
意地悪　うん、うん、もっと掘ればもっと大きな宝物が出てくる？そうか、石油が吹き出るのかもしれないね。（掘りながら退場する）
犬　何も出ないと、ぶっ殺されるのかァ（退場）

柿、二人で顔を見合わせ、黙っている。犬、キャン、キャーンと泣きながら逃げてくる。意地悪爺さんが箒を振上げて追いかけてくる。柿の木が、爺さんを押さえつけて、やがては追いはらってしまう。

第十三景　猿退治

猿、柿の実を抱えて登場、端からかじりついて食べる。
種のはき方など猿に類似すべし、次々に食べる。

猿　うまそうだろう。やらないよ。（赤ンベエをして食べ続ける。このところ動物園の猿を参考にすべし）寒くなったな。柿は腹を冷やすから、たき火でもして暖まろう。（柿の枝から枯木を集めて火をつける）カッチ、カッチ、カチカチ山に火がボーボー、と。（その間に栗がうずくまっている）あれ、いつの間にか栗がころげこんでる。でけえ栗だな。よし、焼き栗にして喰ってやろう。

栗、次第に尻が熱くなるのを、じっと我慢している。破裂音とともに猿に飛びかかる。

猿　驚かすなよ。

蜂、ハタキを槍にして飛びこんでくる。

蜂　ブーン、チクリ。
猿　いたいッ。熊蜂め、やりやがったな。
臼　ずしーん。（猿を押しつぶす）
猿　誰だ、お前は。
臼　石臼だ。蟹を苛めた罰だ。思い知れッ。
猿　重い、重い。
蜂　もう一回、チクリ。
猿　痛いッ。
臼　どしたんだろ、蟹子は。

蜂　呼びに行ってきますよ。（退場）

猿　（泣き出す）もしもし石臼さん、甘栗のお嬢さん。

臼　なんだ。

栗　どうしたの？

猿　カニが来ると僕はあのハサミで首をチョン切られるんですか。

唄　僕はそんなに悪くない
ほんのちょっとのいたずらは
誰でも心の奥底で
やりたいものだと願ってる
あなただって、そうでしょう。あなたも、そうでしょう？
僕はそんなに悪くない
誰でも威張ってみたいんだ
誰でも暴れてみたいんだ
男の子なら当然だ。

蜂　（戻ってきて）彼女ね、残酷なことするの厭だって言うんだ。柿をとったとられたぐらいで首をもらうわけにはいかないし、第一、カニの鋏じゃ猿の首だって本当はチョン切れるものじゃないって。

柿二本、顔を見合わせ、面目なきこなし。猿、同じ唄を明るく楽しく唄い直す。その間に、柿も石臼も踊り出し、爺を除く九人が踊り出し、唄い出す。そして、ピタリと全員が枯木になって静止する。

花咲爺の声　花咲爺、花咲爺、枯木に花を咲かせましょう。（登場）

音楽と共に、全員奇術にて全身花かざりとなる。
花咲爺も花が咲いて若者になり、踊り、唄う。

みんなで遊ぼう　お伽噺
山彦ものがたり
みんなが知ってる　お伽噺
山彦ものがたり
みんな大好き　お伽噺
山彦ものがたり

合唱、斉唱、輪唱の後、最初の女の子と山彦の男の子と一人ずつ残る。

女の子　じゃ、またね。ちょっと、しばらく来られないけど。
山彦　どうして？
女の子　私、お嫁に行くの。
山彦　（非常に驚く）本当？
女の子　どうしてそんなに驚いているの。本当よ。
山彦　そう？　じゃ、もう会えないんだね。
女の子　そんなことない、また来るわ。
山彦　いや、もう来なくなるよ。僕は分かっているんだ。
女の子　どうして？来るといったら、きっと来るわよ。
山彦　いや、お嫁に行ったら……、大人になるから……もう僕たちも見えなくなるよ。
女の子　そうかしら、お嫁に行くって、そういうこと？（不安そうに）

山彦　うん、そういうこと。
女の子　じゃ、赤ちゃんが生まれたら……、そしたら子供を連れて、また来るわ。いいでしょう。
山彦　うん、そうだねえ。子供が呼んだら、僕たちみんな飛び出してくるよ。
女の子　そう、じゃ、その日まで、さよならァ。（客席へ退場。声のみになって）さよなら山彦さーん。
山彦　（じっと涙をこらえて）さよなら。

暗　転

明るくなると十名が再び踊り唄う。

みんなで遊ぼう　お伽噺
山彦ものがたり
みんなが知ってる　お伽噺
山彦ものがたり
みんな大好き　お伽噺
山彦ものがたり

幕